

共同体の幻想： “A Rose for Emily” ’ 論

河崎， 妃奈
九州大学大学院人文科学府： 博士課程

<https://doi.org/10.15017/6790848>

出版情報： 九大英文学. 45, pp.47-59, 2002-12-01. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



共同体の幻想―“A Rose for Emily”論

河崎 妃奈

序

William Faulkner の“A Rose for Emily”(1930) は、南部ジェファーソンの町に生きた一人の女性、Emily Grierson の物語である。この作品は短編でありながら、これまでに多くの批評家たちによって様々に議論されてきた。主なものを挙げれば、エミリーの頑迷な生き方を英雄視する解釈(Brooks and Warren)¹や、父とエミリーの関係から精神分析的に読むもの(Scherting、Allen、Mellard)、フェミニスト的アプローチによるもの(Fetterley)など様々で、すべてこれらは Homer Barron を殺したエミリーの動機に関して異なった解釈を示している。また、エミリーの生きた年代を明らかにしようとクロノロジー論を展開している批評家も多く、彼らはテキスト中に現れている 1894 年という唯一の年を手がかりに錯綜する時間を並べなおし、エミリーの 74 年の年月が南部のどの時代にあたるのかを見極めようとしている。90 年代に入っても、Gene M. Moore が出版以前のスクリプト分析や間テキスト分析を用いてエミリーのクロノロジーを読み直すなど、今日でも新たな議論が展開されている。

このように様々に論じられている作品であるが、この解釈の多義性はフォークナーの巧みな語りの技法に由来している。Michael Millgate の分析によれば、フォークナーはスクリプトの段階で存在していたエミリーと使用人 Tobe の会話を削除し、テキストからエミリーの言葉を取り除いている。また、彼女と生活したり関わりあったりした近親者が、彼女について直接的に

語る部分もない。従って読者は、共同体を代表し外聞的にエミリーを物語る語り手を通してしかエミリーに近づくことができず、この外聞的語りの形態が、エミリーの人物像の把握を困難にし、曖昧なものにするのである。

それでは、エミリーではなく語る主体である共同体を読んでみてはどうだろうか。エミリーがなぜホーマー・バロンを殺したのかということを探るのではなく、エミリーがなぜホーマーを殺したかについて共同体がいかに語っているのかを問題にするのである。エミリーを、共同体を映し出す一種の「鏡」として捉え、共同体の物語を読む、これが本論の取ろうとする立場である。彼らがいかにエミリーを語り、そこにいかなる共同体の視線が現れているのか、その視線と解釈の問題を取り上げてみたい。

共同体が描くエミリーの物語は、彼らが持つ「幻想」とその崩壊を語ったものである。共同体は、エミリーの寝室に残されたホーマーの白骨化した死体に驚愕するが、この驚愕は幻想とのギャップによって引き起こされたものであり、このギャップによってエミリーの「解釈」を試みた共同体の視線のバイアスが明らかになる。すなわち、共同体の「エミリーの幻想」には、共同体の欲したものが映し出され、その「崩壊」/「新たな幻想の誕生」にはこれまで現れなかった視線が映し出されるのである。エミリーの物語に映し出される視線の転換は、共同体に求められた視線の転換である。エミリーの物語を通して見られるこの視線の転換の意味を、南部の歴史と絡めて考察してみたい。

I

エミリーに対する幻想

『エミリーにバラを』の語り手は、主に一人称複数“we”を用いて共同体の人々の視線を共有しながら総体的にエミリーについて語っているが、それと同時に、“the town”、“people”のような社会全体を主体としたものや、“the men”、“the ladies”や“the next generation”のような性や世代を分けたものなど、視線の主体を細かく分け分類的視線をも提示している。語り手が、

その中でもどの立場に属しているのかは議論の余地のあるところであるが、これまでの批評家たちの意見から判断すると、“the next generation”と南北戦争に参加した“the very old men”の間の“the last of the patriarchs”(Fetterley, 39) で、“a thoroughgoing contempt for the ‘ladies’ who spy and pry and gossip out of their petty jealousy and curiosity”(Fetterley, 39) を帯びた「男性」(Fetterley, Scherting, Brooks)²的視線を持つ者ではないかと考えられる。こうした共同体の様々な視線によって、語り手がエミリーをいかに描き出しているのか見ていきたいと思う。

エミリーは語り手によって、二項対立的にアンビバレントに描かれている。例えば、彼女の経済的没落の状況と貴族的な性質、「新しい女性」性とノブレス・オブリージを持つ伝統的女性性、グロテスクな様相と聖性など、対照的な二つの要素がエミリーの中には混在している。しかし、結論から言えば、この対立要素の間で共同体はエミリーについて一つの幻想を構築している。それはエミリーに映し出された共同体の視線のバイアスを明らかにするものであるが、彼らが望むエミリー像(幻想)とは、すなわち、「貴族的、伝統的受動的な聖なる女性」像である。

もともとグリアソン家は、町が目抜き通りに家を連ね屋敷の造りには流行を取り入れるなどして、“the august names”³に属する家系の一つであった。しかし、エミリーの結婚の話が持ち上がる頃にはその「真価以上の」(123)虚勢だけが指摘されるようになり、グリアソン氏の死によって経済状態は逼迫し、エミリーは“a pauper”(123)の状態にまで追い込まれることになる。彼女は陶器の絵付けの稽古事を始めるなど、わずかながらの生活費を稼ぐが経済的困窮は明らかであった。彼女に残された唯一の財産である屋敷は、その凋落の姿を露呈している。

It was a big, squarish frame house that had once been white, decorated with cupolas and spires and scrolled balconies in the heavily lightsome style of the seventies,...Miss Emily's house was left, lifting its

stubborn and coquettish decay above the cotton wagons
and the gasoline pumps—an eyesore among eyesores.
(119)

しかしながら共同体の人々の目には、エミリーはあくまでもグリアソン家の貴族性を保持したがつている女性として映る。例えば、ホーマーと交際している時のエミリーについて、語り手は次のように表現する。

She carried her head high enough — even when we
believed that she was fallen. It was as if she demanded
more than ever the recognition of her dignity as the last
Grierson... (125)

「頭を高く上げ、まるでグリアソン家最後の者として彼女の尊厳を認めて欲しがっているかのようであった」と述べ、「エミリーが」貴族性を固持しているかのようには語られている。しかし、エミリーがいかなる姿勢を見せようとも、それを解釈しているのは共同体側であり、実はこれは彼らのエミリー像にすぎない。すなわち、語り手の視線から読み取れることは、エミリーの持つ貴族性というよりは、エミリーの貴族性を「望む」語り手側の意識である。ここにはエミリーのグリアソンの性質、つまり貴族性を読もうとする共同体の視線があり、貴族的なエミリーという「幻想」が生み出されているのである。

共同体がエミリーに対して貴族性を望む態度は、ホーマーが町を去ってからしばらくして、彼女の屋敷から悪臭が漂うという事件が起きた時の対応にも現れている。この悪臭事件に対応させられた人々の行為は、あくまでもエミリーの貴族としての淑女性にこだわるものであった。彼らは匂いの直接原因を、エミリーではなく黒人の給仕のせいであると考えた。また、町の人々の抗議に応じて、市は特別の会議を開き対応を協議するが、Stevens 判事はエミリーの屋敷の大掃除を命じようと提案する若者に対して、次のように叱責する。“Dammit, sir...will you accuse a lady to her face of smelling

bad?”(122) つまり、エミリーは没落しても尚 “a lady” であり、彼女を貴族として見ず、共同体の一構成員としてしか見ない若い世代の視線は、彼女を貴婦人として扱う人々によって排除されるのである。結局、町の男4人がかりでエミリーに内緒で家に石灰を巻くことによって状況の打開が図られ、彼女のホーマー殺害というグロテスクな事実は隠蔽されることになる。

エミリーとホーマーの交際に対しても、共同体は何度も裏切られるにもかかわらず、彼女が伝統的貴族女性らしく振舞うことを期待する。父親の死後、エミリーは北部人の工夫であるホーマーと交際を始める。人々はそれを一種の気晴らし程度に過ぎず、本気で付き合うものではないと考えていた。これまでどの男性もエミリーの結婚相手にはふさわしくないと退けられてきたのであり、階級が違い、まして南部人の敵である北部人と結婚するというのは考えられないことであつた。共同体は、エミリーの父親と同様の伝統的保守的視点からこの交際を眺めていたのである。しかし、予想は裏切られ、その交際は約二年間続く。彼らの交際は、町の人々によってしばしば見かけられるほどオープンなものであり、ついには「若い人の悪影響になる」(126)と言う者も出てくるなど、男女の交際が開放的になり始めた時代のより自由な交際に近いものであつた。さらに、共同体の視線を裏切るエミリーの行為は、彼女が購入した毒薬の用い方にも現れている。彼らはエミリーが砒素を購入したことを知り、自殺するだろうと考える。しかし、エミリーは自殺どころか、ホーマーを殺害するために砒素を用いるのである。

共同体の視線は、ことごとくエミリーの行為を読み違えているが、共同体にとって、彼女がホーマーを殺害するという考えは、彼女の伝統的女性性の越境を示唆するものであり、たとえ何かを嗅ぎ付けていたとしても⁴、決して表面化しないものであつた。彼らがホーマーとエミリーの別れに関しても、「彼女の女の一生を何度となく阻んできた父親の性質があまりにも毒々しく、凄まじいものであつたのでそう簡単には消えていなかったのだ」(127)と父親の持つ抑圧的權威のせいになっているように、エミリーは父権性の「犠牲者としての受動的女性」でなくてはならなかった。そして、彼女が74歳の生涯を全うするまで、エミリーを受動的な伝統的な女性の枠組みの中で見つめ、

共同体の「幻想」の中に閉じ込めるのである。

エミリーに見られる一種の聖性は、このような保守的女性性や貴族性を望む共同体の視線から見出せる。エミリーを父親に守られたタブロー画として見つめたり、教会の窓ガラスの天使に喩えたりするなど、共同体の視線はエミリーの処女性を読もうとし、性的なものを排除する。また、共同体によって与えられたエミリーの貴族性は、他とは隔たった一種の不可侵性を生み出し、肉体的なものを排除する。エミリーの屋敷から漂う匂いの事件によって、共同体が匂いとエミリーを結びつけようとしなのは、匂いは極めて肉体的なものであり、貴族的性質や処女性の持つ不可侵的神聖さと対立するものであるからである。つまり、対極に位置するセクシュアルなもの、肉体的なものが排除されることで聖性が生み出されているのである。共同体の視線の中でも、窓辺に映るエミリーを捕らえる視線は、ホーマーが町を去った後も彼女の不動性と不可侵性、非肉体性を映し出ている意味で重要である。

匂いを消す作業をしていた男性は、窓辺に映るエミリーの姿を「彫像」として捉えている。

[A] window that had been dark was lighted and Miss Emily sat in it, the light behind her, and her upright torso motionless as that of an idol. (emphasis added, 123)

その事件から数十年が経過した後も、共同体はしばしば彼女の “the carven torso of an idol in a niche”(128)を目にする。彼らの目に映るエミリーは、痩せていようが太っていようが、白い服を着ていようが黒い服を着ていようが関係なく同じであり、非肉体的で、不変的な性質を強調している。フォークナーの描く世界で、「窓」は Noel Polk が指摘しているように、“an icon of impotence and frustration”(31)であり、たいていの場合、「家」が表象する法の境界であり、道徳的禁止を私的に侵犯する役割を担う。この窓枠に閉じ込められたエミリー像は、道徳的禁止を侵犯することのなかったエミリーの「処女性」を強調し、グリアソン家と社会の階級的格差を示す象徴的壁に隔て

られた不可侵性を示唆するものである。

幻想の崩壊

共同体の人々はエミリーの死後、グリアソン家の二階に残された、閉ざされた部屋に侵入する。そこで彼らはベッドに残されたミイラ化した遺体とその横の枕の上に残っていた髪の毛を発見する。ベッドの上のバロンは、今では崩れてしまっているものの「明らかに以前、抱擁の形を取っていた」(130)と感じられるものであり、まさにこれを目にした共同体は、エミリーに対する視線の転換を余儀なくされるのである。つまり、彼らには死体とともに「抱き合っ」横たわるエミリーという、これまでの幻想とは全く異なる新たな「グロテスクな幻想」が生み出されるのである。彼らがエミリーに対して抱きつづけた貴族性や処女性、受動的な女性性はすべて否定され、彼らが排除しようとしたセクシュアルで、肉体性を感じさせる性倒錯的、能動的な女性としてのエミリー像への転換が起きるのである。ベッドに横たわる遺体を前に「長い間立ち尽くし」(130)言葉を失っていた共同体の姿は、彼らの幻想が崩れ去った瞬間であることを何よりも物語っている。エミリーの屋敷に侵入し、ホーマーの死体を見つけることで、これまで共同体が捉えていたエミリーは、自分たちがエミリーに「見たかったもの」であることを知る。まさにフェタリーの次の言葉に表されている通りである。

Emily is metaphor and mirror for the town of Jefferson; and when, at the end, the town folk finally discover who and what she is, they have in fact encountered who and what they are. (43)

彼らは、エミリーの経済的没落を感じ、彼女の自由を求める恋愛観を捉えながらも、自分たちの望む視線をエミリーに反映させ、自分たちの価値基準の中でイメージを作り上げていたに過ぎないのである。

II

共同体の旧南部の幻想

南部共同体がエミリーに読み取ろうとした保守的伝統的性質は、共同体の持つ「幻想」であるが、それはまさに南部の「旧南部」に対する幻想と関連付けられる。南北戦争の敗退によって、政治、経済、社会のすべての面において、変革を余儀なくされた南部は、北部の一方向的な再建活動によって大きな傷跡を残し、過去の栄光にすがりつくこととなった。共同体は旧南部の姿を理想的幻想として抱えつづけることになるのである。理想的幻想としての旧南部の幻想がエミリーに対する保守的視線を生んでいるのであるが、さらにエミリーに対する視線には、共同体の「過去性」、すなわち「旧南部的な性質」を求める視線が直接彼女を旧南部の象徴として捉えることによって現れている。

共同体がエミリーを「旧南部」を象徴するもののように捉えていたことを表す部分は、エミリーの葬式に出席した男性たちの気持ちに表される「記念碑」という言葉に現れている。語り手は男性たちが、エミリーの葬式に出席したのは、“through a sort of respectful affection for a fallen monument” (119) からだと述べる。この「記念碑」という言葉は、エミリーが彼らにとって、今では倒れてしまった何らかの歴史の瞬間を記念する「しるし」であったことを示すものである。エミリーは何を記念するものであったのだろうか。「倒れてしまった」という形容がついていることから、現代において時代錯誤となってしまった何かであると考えれば、旧家グリアソン家の過去の栄光、さらには旧南部的性質と考えられるのではないだろうか。人々は、南部再建時代を一人で生き抜いたエミリーという女性に敬愛の情を感じているというよりは、「過去の栄光」のしるしであったエミリーに思いを寄せているのである。

また、エミリーに「旧南部性」を映し出す共同体の視線は、南軍兵士として戦った男たちが、彼女の葬儀に訪れ、まるでエミリーを同時代人であるかのように見つめている視線にも現れている。彼らは「まるで彼女とダンスした

ことがあり、彼女に求婚させしめたかのように」(129)エミリーを思い出している。しかし、彼らが「求婚」する頃にはエミリーはまだほんの子供であった⁵。エミリーを自分たちと同世代であるとみなすのは、彼女自身を見ているのではなく、彼女に旧南部的性質を見ているからだと考えられるだろう。

南北戦争に従軍した人々の時間観に特徴付けられているように、南部の時間観は「過去が先細りとなっていく道のようなものではなく、冬の季節もほとんど届きそうもない広々とした牧草地」(129)であるような理想的な空間であるという認識に近い。すなわち、旧南部の歴史（幻想）が過去のものとして消滅していかに、「冬の来ない暖かな空間」として残っているのである。このような時間観が示すように、南部は過去の姿を過ぎ行くもの“a diminishing road”(129)として捉えることができないのであるが、これは死体を抱えたエミリーの状況と何ら違いはなくグロテスクなものに他ならない。エミリーがホーマーを隠しつづけて、保持しつづけたことと、共同体がエミリーに旧南部の幻想による女性性を見、保持しつづけたことは、究極のグロテスクなアナロジーである。

エミリーは二階の寝室に一人の男性の遺体を隠していた。町にひどい匂いが充満するほど遺体が腐ろうとも処分することはなかった。それどころか、遺体の横に「鉄灰色の」(130)髪の毛が残されており、死体と共に彼女が眠っていたことが示唆されていた。このエミリーの姿には、実体を見ない「幻想」に支配された姿が現れている。ホーマーという名はあっても、そこには腐敗していく肉体があるばかりであり、彼女はホーマーの「幻想」の中に生きていたということができるだろう。従って、寝室に残されたグロテスクな様相は、エミリーのセクシュアルな伝統性の放棄の姿であると共に、実体に盲目な、幻想によって視線を曇らされた人間の姿があるのである。これはまさに、共同体の旧南部に対する視線のアナロジーである。死んでいるのに花婿としてベッドを共にするエミリーと、失われた旧南部的価値にしがみつき、いわゆる一つの歴史であるエミリーの物語を読み違える共同体は共に、失われたものを過去化できないグロテスクさの中に存在しているのである。

歴史解釈の視線と共同体の視線

この作品が語られた時代は、出版年代とほぼ同時期に設定されている。30年代当時、南部の貴族制は南北戦争以降、南部の経済の悪化と共に危機的状況に陥り、北部の平等思想の前に意味を失いつつあった。また、社会進出を始める女性が増え、よりリベラルな考え方を持った女性が現れ始めたことで伝統的価値観が揺らぎ始めていた時代である。そうした時代の変化の中で、共同体ははまだエミリーに保守的価値観を反映させていたのであるが、エミリーのホーマー殺害によって写し出された視線の転換は、南部共同体において保守的伝統的視線によって生み出される歴史はもはや「幻想」でしかなく、価値意識の転換を余儀なくされているということを示唆している。それは南部の保守的視線の歴史解釈の限界を示唆するものである。共同体の保守的視線は歴史の読みの可能性を限定するものではあっても、より近い真実への探求的力にはなりえない。すなわち、彼らの織り成す歴史の根底にある旧南部の幻影は、人々の視線を鈍らせ、エミリーの物語が示すように真実に向かっていくことを困難にするのである。南部において「旧南部」の幻想が残りつづける限り、視線のバイアスが消えることはない。南部の歴史を語る上で、南部の人々は自らが持つ旧南部の幻想を新たな幻想に書き直すことが迫られている。

失われたものを過去化しない視線のグロテスクさは、ある視線による幻想の転換によって生まれてくるはずの新しい歴史を否定することである。それこそが南部の鬱積し澱んだ歴史観を生んでいる。こうして示唆された南部のグロテスクな歴史観は、それを打ち破り新たな「幻想」への書き換えを必要とするが、その力は今作品においてエミリーの屋敷に侵入する、幻想を打ち砕く力として暗示されている。最後に、『エミリーにバラを』に描かれている視点の転換を促す力を指摘し、結論としてみたいと思う。

結

『エミリーにバラを』における共同体が抱くエミリーの幻想は、それを否

定する視線を排除することで成立している。エミリーの悪臭事件の例に見られるように、それが社会を代表する視線となることはなかったが、確かにテキストにはエミリーの秘密に迫ろうとする視線が示唆されている。その一つが、新しいジェネレーションとして指摘される人々の視線であり、もう一つがゴシップ的な女性たちの好奇心のまなざしである。社会の中心的世代になりつつあった “the next generation, with its more modern ideas”(120) にとっては、エミリーが税金を納めるのは当然の義務であり、Sartoris 大佐の言葉一つで決まった税金の免除は不公平なものであった。Allen の解釈に見られるように、彼らはより民主主義的な視線を持っており、エミリーの貴族制度によって生み出された差異性を好まなかったのである。彼らにとってエミリーは社会の構成員の一人であり、他の人々と平等でなければならず、従って彼女の家を訪れ、税金納入を直訴するという行為に訴えるのである。今作品においては、彼らの視線はエミリーを語る中心的視線となりえていないが、貴族的社会の視線からより平等を求める民主主義的視線に移行しようとする視線の転換の可能性が確かに示唆されている。

また、エミリーの屋敷に立ち入る際の女性たちの力に注目したいのだが、彼女たちはチャンスがあるごとにエミリーへの介入を試みてきた。グリアソン家からひどい匂いが漂ってきたときに最初に不平を口にしたのは女性であったし、ホーマーとの交際に対しても男性が口を出すことを尻込みしたのに対して、介入を試みたのは女性たちであった。最終的に最初にグリアソン家に立ち入っていくのも女性たちであるが、こうした力は男性中心主義的南部社会においての新たな力、視線の台頭を示すものとして捉えることが可能であるだろう。ゴシップ的メディアの力を髣髴させる視線であるとも言えるかもしれない。南部の歴史を語る上で、南部の人々は自らが持つ旧南部の幻想を新たな幻想に書き直すことが迫られている、と述べたが、これらの視線こそ南部の新たな幻想の創造の一助となる可能性を示唆している。

共同体は、旧南部の姿に対する執着によって、エミリーの物語を読み違えてしまうが、この解釈の失敗は、南部の歴史解釈における一つの教訓を与えてくれる。フォークナーは南部の歴史を鋭く見据えた作家の一人であるが、

南北戦争以後、解決策を見出せない社会問題を題材とし、問題点を指摘しつづけた。従来の幻想を破壊し、新たな幻想を作り出すという永遠の繰り返しの中で、新たな歴史が生み出され、真実の追究が行われる。南部の歴史解釈がもはや機能しないとき、必要とされるのは従来のものを打ち壊して行こうとする視線である。今作品には、当時、南部にとってはまだ周辺的であったが、確実に新たな歴史を生み出していく視線が示唆されている。『エミリーにバラを』は、共同体のエミリーの物語の解釈行為を通して、それがたとえ悲劇的であっても直面する事によって生まれる「幻想」の連鎖が新たな歴史を生み出していく、という歴史解釈の一面を垣間見せてくれるものであることを指摘したい。

註

1. M. Thomas Inge の *William Faulkner: A Rose for Emily* (p25-29)を参照した。
2. Brooks は *William Faulkner: Toward Yoknapatawpha and Beyond* の中で、語り手について次のように言っている。“I think of him as a man in his fifties or sixties at the time of Miss Emily's death.”(emphasis added, 159) また、Scherting も “The narrator is evidently a male of about the same age as Emily.”(emphasis added, 397)と断定する。
3. William Faulkner, 119. 以後、この版からの引用は本文中に頁数のみを括弧内に示す。
4. 共同体はエミリーを埋葬した後、彼女の屋敷に入るのだが、語り手はその時すでに彼らがエミリーの屋敷の二階に「押し入らねばならない」部屋があることを認識していたことを明かしている。“Already we knew that there was one room in that region above stairs which no one had seen in forty years, and which would have to be forced.” (emphasis added, 129) 共同体はエミリーに、彼らが明らかにせねばならない何かがあることを嗅ぎ取っていたと言える。
5. クロノロジーに関しては序文でも述べているように様々な説があるが、大きく分ければ、エミリーが 50 年代に生まれているとするもの、Going (Inge, 50-54),

Hagopian, Cunliffe, and Dolch (Inge, 76-83), Brooks, Moore と 60 年代に生まれているとするもの、McGlynn (Inge, 90-92), Woodward (Inge, 84-86)がある。しかし、今作品が 1930 年に出版されていることを考慮すると、それ以前に死亡が推定されている説を取るほうが自然であるように思われる。1930 年から 2～3 年の幅を考慮しても、南北戦争時には 10 歳前後であったと考えられる。

引用文献

- Allen, Dennis W. “Horror and Perverse Delight: Faulkner’s ‘A Rose for Emily’.” *Modern Fiction Studies* 30 (1984): 685-96.
- Brooks, Cleanth. *William Faulkner: Toward Yoknapatawpha and Beyond*. 1978. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1990.
- Faulkner, William. *Collected Stories of William Faulkner*. 1950. New York: Vintage, 1995. 119-30.
- Fetterley, Judith. *The Resisting Reader: A Feminist Approach to American Fiction*. Bloomington: Indiana UP, 1978.
- Inge, M. Thomas, ed. *William Faulkner: A Rose for Emily*. Ohio: Merrill, 1970.
- Mellard, James M. “Faulkner’s Miss Emily and Blake’s ‘Sick Rose’: ‘Invisible Worm,’ *Nachträglichkeit*, and Retrospective Gothic.” *The Faulkner Journal* 2 (1986): 37-45.
- Millgate, Michael. *The Achievement of William Faulkner*. 1963. Lincoln: U of Nebraska P, 1978.
- Moore, Gene M. “Of Time and its Mathematical Progression: Problems of Chronology in Faulkner’s ‘A Rose for Emily’.” *Studies in Short Fiction* 29 (1992): 195-204.
- Polk, Noel. *Children of the Dark House: Text and Context in Faulkner*. Jackson: UP of Mississippi, 1996.
- Scherting, Jack. “Emily Grierson’s Oedipus Complex: Motif, Motive, and Meaning in Faulkner’s ‘A Rose for Emily’.” *Studies in Short Fiction* 17 (1980): 397-407